



 Data	2022-33
監督・脚本・原案・製作: ギレルモ・デル・トロ	
原作: ウィリアム・リンゼイ・グレスハム『ナイトメア・アリー 悪夢小路』	
出演: ブラッドリー・クーパー/ケイト・ブランシェット/トニ・コレット/ウィレム・デフォー/リチャード・ジェンキンス/ルーニー・マラロン/パールマン/メアリー・スティーンバージェン	

👁️👁️ みどころ

アカデミー賞は多様性が定着したようだが、『ジェイブ・オブ・ウォーター』（17年）に続く、ギレルモ・デル・トロ監督・脚本・原案・製作の本作は、さて？

「ナイトメア」は悪夢、「アリー」は小路。そんなタイトルの本作は、カーニバル（見世物小屋）、霊媒、タロット占い等々、おどろおどろしい（？）要素でいっぱいだから、メチャ面白い。

主人公が魅せる“読心術”はお見事だが、それを駆使した“幽霊ショー”は如何に？騙し合いの極致をじっくり見極めたい。

そんな本作がなぜ作品賞、監督賞、脚本賞を受賞できなかったの？一方で、そんな疑問を持ちながら、150分間をたっぷり楽しみたい。

—————*—————*—————*—————*—————*—————*—————*—————*—————*—————

■□■ナイトメアとは？アリーとは？原作は？監督は？■□■

ナイトメア（Nightmare）とは、悪夢のこと。また、アリー（Alley）とは、路地、小道のこと。したがって、本作のタイトルになっている『ナイトメア・アリー』とは“悪夢の小路”のことだ。

本作は第94回アカデミー賞で作品賞を含む4部門にノミネートされたが、作品賞ノミネート作の中にはウィル・スミスが主演した、『ドリームプラン』も含まれていた。『ドリームプラン』は文字通り“アメリカンドリーム”を体現した前向きの気持ちをもたらす面白い映画だったが、本作はまさに“ナイトメア・アリー”というタイトルがピッタリのサスペンス・スリラー大作だ。

そんな本作の原作は、ウィリアム・リンゼイ・グレスハムの『ナイトメア・アリー 悪夢小路』。また、そんな本作を監督・脚本・原案・製作したのは、ギレルモ・デル・トロ監

督。彼は、アカデミー賞作品賞、監督賞等4部門を受賞した『シェイプ・オブ・ウォーター』（17年）『シネマ41』（10頁）の監督として有名だが、彼にはまさにこんな映画がピッタリ！

■このカーニバルに注目！その面々に注目！■

時は1939年。本作の物語が始まるのは、「紳士淑女の皆さん、世界最大のカーニバルへ、ようこそ！」の呼び込みに誘われ、流れ者のスタントン・カーライル（ブラッドリー・クーパー）が怪しげな“獣人ショー”が始まるテントに潜り込むところからだ。

野心溢れる青年スタンは結局そのカーニバルで働くことになるのだが、そこでは、①大きなインパクトを与える怪しげな獣人の他、②カーニバルのマネージャーであるクレム（ウィレム・デフォー）、③読心術師のジーナ（トニ・コレット）等の重要人物が登場するので、その分析をしっかりと。さらに、④全身に電気を通すショーで人気を呼ぶ女性、モリー（ルーニー・マーラ）の清らかな美しさに心を奪われたスタンは、少しずつ心を開き始めたモリーにさまざまなモーションをかけていくが、さてモリーは？

本作導入部分ではスタンがクレム率いるカーニバルの中でさまざまな技術を会得し、巣立っていくストーリーが展開していくので、それをしっかり確認したい。

■この読心術はすごい！これはホンモノ？それとも？■

本作の導入部では、響き渡る“獣人ショー”への呼び込みの声印象的だが、そのショーはホンモノ？それともニセモノ？代金10セントは正当、それともぼったくり？それは観客ひとり一人の価値判断だが、このカーニバルのマネージャーたるクレムに気に入られて一座で働くことになったスタンが、この一座の中で学んだことは多い。彼は読心術師のジーナに気に入られたため、ジーナのパートナーであるピートと組んでいろいろなトリックを取り入れたショーで読心術を披露していたが、ある日、酔いつぶれたピートが失態をしかすと・・・？

ジーナとピートが演じている幽霊ショーと呼ばれるトリックはもちろんインチキだが、霊媒能力を信じる人々の心の奥に立ち入る高度な技術が不可欠で、技を教えてほしいと頼み込むスタンに対して、ピートはお手製の暗号システムを書いた手帳を見せてはくれたものの、「悪用されると危険な本だ」と語り、決して渡さなかったのは仕方ない。しかし、全身に電気を通すショーで人気を呼ぶモリーと共に真剣に読心術の修練を積んだスタンは、ついにある日モリーに「俺と組んで、もっと大きな場所でショーをやろう」と切り出すことに。

■読心術は面白い！麻雀やポーカーにもその要素が！■

ある日、カーニバルを襲った危機を“読心術”を駆使した見事な対応で乗り切ったスタンは、それから2年後、一緒についてきたモリーと組み、一流ホテルのステージで上流階級の人々の前で読心術を披露していた。スクリーン上を見ている、その技術のすごさがよくわかる。TVで観るMr.マリックが魅せるマジックのすばらしさと同じで、そこに何ら

かのトリックがあるのは当然だが、それが決して見破れないところがプロのプロたる由縁だ。

私は子供の頃からいろいろなゲームが大好きだった。将棋や囲碁は99%が実力だが、マーじゃんやポーカーは半分が実力、半分が運。もっとも「運をつかむのも実力のうち」だと言ってしまうと、それまでだが……。私が今ハマっているVシネマの一つが、BS12で連続放映している『高レート裏麻雀列伝 むこうぶち』だが、これはメチャ面白い。また、私はかつて“100円玉ゲーム”なるゲームにハマったが、これは心理戦だから読心術が不可欠。そう考えると、私が50年近くやっている弁護士業務だって、読心術が不可欠だ！！

すると今、モリーを助手として、スタンが華麗に披露している芸は読心術そのものだが、それはどこまでホンモノ？どこまでインチキ？誰かそれを見破る人物がいるの……？

■□■トリックがバレた？新たな難問は？窮地を如何に脱出？■□■

プロ野球のサインプレーにサインミスはつきもの。それは仕方ない。それと同じように、スタンは最近、時折失敗するモリーを心配していたが、ある夜のショーでスタンはある美女(ケイト・ブランシェット)にショーの内容を手厳しく指摘され、そのトリックを見破られたうえ、「私のバッグの中に何が入っているのか当ててみる！」と迫られる羽目に……。

本作は2時間30分の長尺だが、ギレルモ・デル・トロ監督が書いた脚本はメチャ面白いから、飽きるころは全くない。そして、ゲーム好き、バクチ好きの私には、このシーケンスは本作最大の見どころだ。この事態は突発的なもので、ショーを演じていたスタンのシナリオにないものだから、スタンにこの女性が持っているバッグの中身がわかるはずがない。しかし、その大きさは？重さは？そしてまた、そんな難問をスタンに突きつけてくるこの女性の狙いは？そんなこんなを瞬時に観察し、かつ推理したスタンは、見事にバッグの中身を言い当てたからすごい！これはあくまで確率の高さから導いた結論で、マーじゃんやポーカーの極意にも通じるものだ。

この結末に女性のプライドが大きく傷つけられたのは当然だが、連れの紳士から「個人的に依頼したいことが……」と頼まれると、スタンは……？

■□■この心理学博士は敵？いや、彼女と組めば大成功！？■□■

スタンがクレム率いるカーニバルの中でジーナとピートから学んだのは、読心術を駆使した「幽霊ショー」。その修業のおかげだろう。あの危機の中で、見事な観察と推理によって女性客のバッグの中身を言い当てたスタンに観客から惜しめない拍手が送られたのは当然だ。そんな流れの中でスタンが仕掛けたのは、彼女の連れの紳士に対して、「最近亡くなった人が横にいる」という「幽霊ショー」。それに成功し、さらなる拍手喝采を得たスタンに対して、判事だと名乗ったその紳士が、「個人的に見てほしい」と依頼したことの内容は？そんな事態の中、あの女性から渡された名刺には「リリス・リッター心理学博士」と記されていたが……。

数日後、リスのオフィスを訪れたスタンは、彼女が多くの重要人物のカウンセリングを通じて職務上知り得ている秘密情報を、自分の読心術と幽霊ショーに活用しようと提案。リスは、スタンのカウンセリングによってスタン自身の“真実”を提供することを条件として、その提案に応じたから、アレレ。もっとも、スタンの狙いは大金稼ぎだったが、リスはお金には全然執着しておらず、謎に満ちたスタン自身の“真実”に興味があったらしい。しかし、“流れ者”の“読心術師”に過ぎないスタンはともかく、心理学博士の肩書きを持つリスが、そんなことに協力しているの？それは博士号の剥奪に至る大問題なのでは？

あらかじめ判事についての重要情報をリリーから提供してもらったスタンが、判事の幽霊ショーを大成功させたのは当然。しかし、それは完全なインチキだから、それで高額報酬を受け取るのは如何なもの？そんな私の倫理観はきっと正常だが、金の魔力に取り付かれたスタンは、判事の友人で大富豪のエズラ・グリンドル（リチャード・ジェンキンス）から、さらなる依頼を受けると・・・？

■□■新たな霊視の依頼は？再び大成功！そう思ったが・・・■□■

リスから得た秘密情報を元に、判事から依頼された幽霊ショーをまことしやかに演出し、大成功させたスタンに対するグリンドルの依頼は、亡き恋人を出現させること。しかし、不老不死の薬を求め続けた始皇帝の願いが叶えられなかったのと同じように、どんな幽霊ショーでも、死んだ人間を蘇らせることは不可能。そんなことは、依頼したグリンドルも依頼されたスタンもわかっているが、スタンにはグリンドルが再会したいと申し出ている亡き恋人の姿形はもちろん、そのデータはすべてリスから提供された情報によってバッチリ。それなら、モリーをうまく活用すれば・・・。

『シェイプ・オブ・ウォーター』における魔訶不思議な演出で、何とも魅力的な映像美を見せてくれたギレルモ・デル・トロ監督が、本作ラストでは、スタンが企画する一世一代の霊視（幽霊ショー）を見事に演出してくれるので、それに注目！グリンドルの元恋人とそっくりの化粧を施したモリーの姿を見て、グリンドルはびっくり。スタンの幽霊ショーは、またまた大成功。一瞬そう思ったが、さあ、その後の展開と本作の展開は？そしてまた、モリーと組んであれほど大成功を収めていたスタンの没落は如何に？

本作のストーリーは、スタンが10セントを払って獣人ショーを観るところから始まったが、本作ラストに見るスタンの姿、形は？「因果は巡る」とは、まさにこのことだ。ギレルモ・デル・トロ監督のストーリー展開の見事に脱帽！！

2022（令和4）年4月6日記